



たじひのだより

松原市文化財情報誌 No.12

池内遺跡発掘調査速報—平安時代の農村か?—



① 平安時代の建物跡(北西から)

平成24年(2012)4月から7月に池内遺跡^{いけうちせき}の範囲内にある天美東5丁目の市営天美団地跡地で発掘調査を行いました。調査では、平安時代^{へいあん}と弥生時代^{やよい}～古墳時代^{こふん}の生活面を見つけることができました。

平安時代(およそ1000年～1100年前)の生活面からは、建物や塀などの柱を立てるために掘られた穴(柱穴^{ちゅうけつ})と溝の跡がたくさん見つかりました。ここから数棟の建物が集まったムラの周りに畑が広がる姿を復元することができます(写真1)。

建物は草や木の板などで屋根を葺いた小さな住居や小屋で、建て替えられた建物もあります。捨てられた土器に高価な品がないことと役所や社寺



調査地の位置図

で使う道具が見つかっていないことから一般の農民達のもので推測できます。

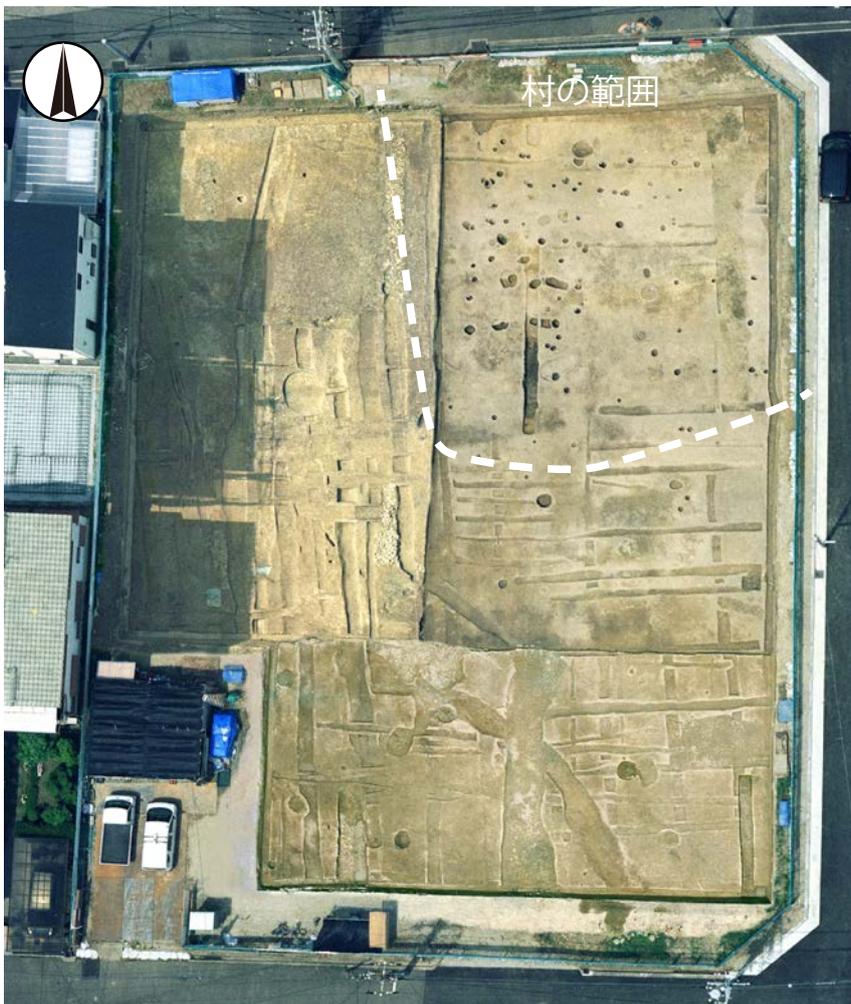
見つかった畑の跡ですが、作物を植えていた畝はすでに削られており、畝と畝の間の溝が平行する数条の溝として残るのみです(写真2)。溝は方位



② 平安時代の畑 (南から)



③ 弥生時代～古墳時代のお墓 (南から)



④ 池内遺跡の垂直撮影合成写真 (上が北、平安時代の生活面)

に沿って掘られていて、条里制（方位に沿って土地を基盤目状に区画する古代の制度で、今でも松原市域に跡が残っています。）を強く意識して畑を作ったことがわかります。

畑に植えられた作物ですが、土中に残っている当時の花粉の分析からソバなどの雑穀であることがわかりました。また、畑に稲を植えたり一時的に水田に変えたりしていたこともわかりました。ソバは条件の悪い土地でも簡単に育ち種まきから2～3ヶ月で収穫できるため、自然災害による食糧危機への備えとして重宝されていました。当時は、ソバの実を雑穀に混ぜて炊いたり粉末を団子のような塊状にして食べていました。

池内遺跡では平安時代の有力者の屋敷や土地（荘園）を管理するための施設と考えられる建物が見つかっていましたが、実際に田畑を耕した一般農民達のムラがどこにあるか謎でした。しかし、今回の調査で有力者の屋敷と考えられる建物の200m程南にあったことがわかりました。

平安時代のムラは小規模のものが地域内にいくつも点在するため、他にもまだ存在するはずです。

また、平安時代の生活面の下から弥生時代～古墳時代（およそ1800年～2000年前）の墓が見つかりました。溝で四角く囲んだ内側に土を盛って墳丘にする墓（方形周溝墓）で、棺が残っておらず誰が葬られたかは不明です(写真3)。

今回の発掘ではきらびやかな発見はありませんでした。しかし、古代の天美に暮らした人々の姿を知るには、幅広い成果を地道に集める必要があります。

今回の発掘ではきらびやかな発見はありませんでした。しかし、古代の天美に暮らした人々の姿を知るには、幅広い成果を地道に集める必要があります。



古文書紀行—群馬県に残る松原ゆかりの石灯籠を訪ねて—



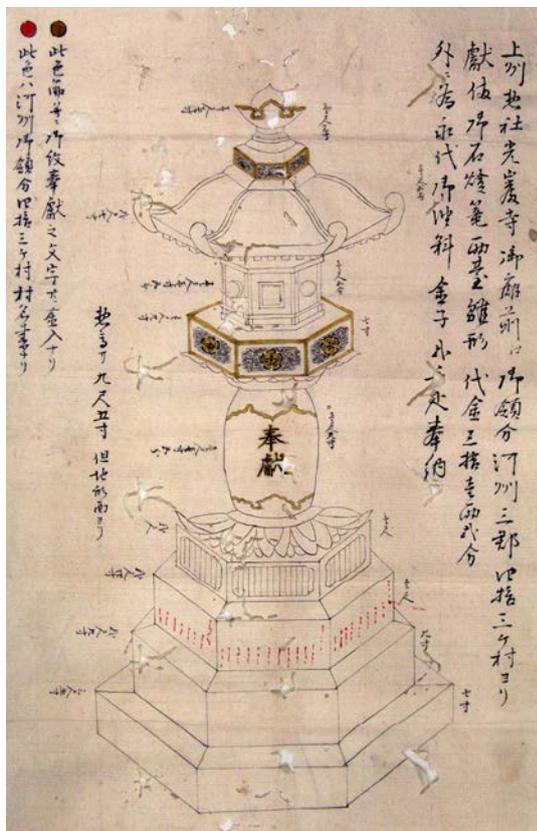
江戸時代の人が残してくれた古文書から小さな旅が始まりました。きっかけは手書きされた石灯籠の図面です(写真1)。石灯籠の製作を頼まれた石屋が注文者に送ったものようです。注文者は松原市域を含む河内国(現、大阪府)の村むら、建てられた場所は上野国総社(現、群馬県前橋市総社町)にある「光巖寺御廟前」です。光巖寺は譜代大名・秋元家の菩提寺(先祖を祀る寺)で、秋元家は東北・関東地方のほかには河内国の一部に領地を持っていました。

関連する記録によれば、寄付した村むらは「運搬費用がかかるので石を現地で調達してほしい」と願い出ているので、上野国総社付近に住んでいる石屋が製作したと考えられます。上野国は江戸より遠い地です。寄付した人びとは現地に行き、石灯籠を見ることはなかったでしょう。代金は金31両2分で、当時の一人暮らしの男性がぜいたくしなければ10年くらい生活できる大金でした。石

屋へ橋渡しをした仲介者は秋元家の家来だったので、代金を支払えば石灯籠は必ず建てられると信じてはいたでしょう。けれども、細かく書き込まれた図面を見ることで、自分たちの寄付した石灯籠を身近に感じ、「立派だなあ」と安心したかもしれません。この図面は当時の人びとにとって、写真と同じ役割を果たしていたのです。

実際に光巖寺を訪れてみると、石灯籠は寺のとなりにある宝塔山古墳のふもとに建てられています(写真2)。この古墳の頂上には秋元家歴代墓地があります。石灯籠は図面どおりで、松原市域の14か村を含む河内国41か村の村名や「文化九壬申歳五月」(文化9年=1812年)という年月が刻まれていました。この41か村は秋元家の河内国領分と一致します。

今回の訪問は石灯籠が完成してちょうど200年後にあたる年でもありました。石灯籠は地元の人びとによって今でも大切に保存されています。



① 文化9年(1812)に寄付された石灯籠の図面(中山經正氏所蔵)。「惣高さ九尺五寸(高さ3メートル弱)とある。また「御領分河州三郡四拾三ヶ村」や「河州御領分四拾三ヶ村」とあるが、刻まれた村の数は41。



② 階段脇に3対の石灯籠があり、一番背の高い中央の1対が河内国領分のもの。階段そばの1対は文化7年(1810)8月建立の武蔵国領分が寄付したもの。(撮影日:2012年9月)



郷土資料館 こんなんありますっ!



このガラスの容器^{ようき}はなんでしょう？牛乳ビンではありません。これは魚やエビなどを捕^とるための道具で、高さが30cm ぐらいあります。

一般名称は釜^{うけ}とありますが、東北地方から関東北部ではドウ、関東南部から静岡県ではモジリ、静岡県西部から愛知県ではウゲ、中国・四国地方ではモジなど様々な地方名があり、近畿地方ではモンドリと呼ばれています。

釜の多くは、竹を編^あんで作られていましたが、大正10年(1921)頃にはガラス製のもの普及しはじめ、近年では金網製やプラスチック製のもの作られるようになりました。

今回紹介^{しょうかい}するのは、ビンの形をしているので河内ではビンモンドリと呼ばれています。使い方はビンの口にあたる部分を草などでふさぎ、ビンの底にあたる部分だけをあけ、中に魚をお

びき寄せるためのエサを入れ、流されないように紐^{ひも}をつけて川や池などに沈めておきます。中に入った魚は入口がかえし状になっているため出られなくなる仕組みです。水に沈めて時間をおいてから引き上げ、ふさいだ方の口をあけて魚を取り出します。

紹介したビンモンドリについて、いつ、どこで使われていたのか詳しいことは伝わっていませんが、その大きさから小魚やドジョウなどを捕るためのものと思われます。



みて・きいて・ふれて

昨年11月の松原中学校フェスタでは、校区内の文化財の展示^{いしうす}や石臼での豆引き、江戸時代から現代の古銭や記念硬貨の模様を色鉛筆で写し取る体験を。

また、1月26日の第59回文化財防火デーにあわせて23日に松原市消防本部・消防署による文化財防火訓練^{しばがきしんじや}を柴籬神社でおこないました。訓練には、神社の関係者をはじめ地元消防団の方々と一緒に文化財の持ち出しや初期消火・放水訓練が行われ、文化財を守るため皆さん真剣な面持ちで取り組まれました。



柴籬神社で行われた防火訓練の様子

松原市内の文化財について

お知りになりたい方へ

■ ホームページ (ホーム画面右端の「分野で探す」より「文化・スポーツ」の項目にある「文化財」をクリック)
<http://www.city.matsubara.osaka.jp>

■ 文化財の展示／図書の販売
ふるさとびあプラザ1F・郷土資料館 (財団法人松原市文化情報振興事業団)
〒580-0016 大阪府松原市上田7丁目11番19号 電話 072-336-6800

■ 埋蔵文化財に関する手続き／文化財に関する相談／図書の販売など
松原市役所5F・教育委員会地域教育振興課
〒580-8501 大阪府松原市阿保1丁目1番1号
【電話】072-334-1550(代) / 【FAX】072-332-7720(教育委員会事務局)